

**平成24年度
創生授業実施報告書**

**愛媛大学 教育・学生支援機構
共通教育センター**

目次

前学期

- 10260 歴史の多様性／寺内 浩（法文学部人文学科）・・・ 1
- 10279 異文化へのまなざし／田中寿郎（大学院理工学研究科）・・・ 3
- 10288 文学の世界／佐藤栄作（教育学部）・・・ 6
- 10297 異文化へのまなざし／秦敬治（教育・学生支援機構）・・・ 9
- 10317 くらしと政治／楢林建司（法文学部）・・・ 11
- 10374 自然の法則／大田伊久雄（農学部）・・・ 14
- 10375 自然の法則／中川祐治（先端研究・学術推進機構）・・・ 17
- 10390 生命の不思議／水谷房雄（農学部）・・・ 19

後学期

- 20263 ことばの世界／清水史（法文学部）・・・ 21
- 20280 異文化へのまなざし／村上和弘（国際連携推進機構）・・・ 26
- 20281 異文化へのまなざし／田中寿郎（大学院理工学研究科）・・・ 3

科目番号：10260	科目名：歴史の多様性
担当教員：寺内 浩	
開講時期：前期	水曜4限 履修者数：30名

共通教育「創生授業」実施報告書

代表教員 所属 法文学部
氏名 寺内 浩

1. 授業データ

開講時期 : 平成24年度 前学期
時間割番号 : 10260
科目名 : 歴史の多様性
授業題目 : 四国遍路を学び、歩く
履修者数 : 30名

2. 授業の目的

四国遍路、とりわけ「歩き遍路」がブームになっている。しかし、四国遍路がいつごろから始まり、どのように変化してきたかを知っている人は少ない。この授業の目的の一つめは、こうした四国遍路の歴史を学ぶことである。二つめの目的は、実際に遍路道を歩くことにより、「歩き遍路」の意味を考えることである。交通手段が発達しているにもかかわらず、歩いて札所を巡る人が増えている。その理由を、実際に「歩き遍路」を体験することにより、考えてもらいたい。

3. 授業の到達目標

- (1) 四国遍路の歴史を知る。
- (2) 「歩き遍路」を体感し、その意味について思考できる。
- (3) 「歩く」ことの意味を説明できる。

4. 共通教育の理念・教育方針に関わる項目 (対応する項目をチェックして下さい)

基本姿勢 コミュニケーション力 基本技能 基礎知識 基礎的思考力

5. 授業概要

授業は講義と実習を組み合わせで進めた。現地実習Ⅰ・Ⅱ（「歩き遍路」）は6月16日（土）、17日（日）に実施し、2日間で約50Km（大学正門前～今治市の55番札所南光坊）を歩いた。

6. 授業の進め方と特に留意した事柄

講義を9回行い、四国遍路に関する知識が取得できるようにした。また、ウォーキング実習を2回実施し、現地実習に備えた。二日間に及ぶ現地実習では、支援学生や伴走車を配置し、学生が目的地まで

無事歩けるようつとめた。

7. 学生の反応

最終授業時に、この授業で得たものはなにか、をアンケート調査した（成績評価対象者26名中21名が回答）。設問1、「今回の授業でなにか得るものがありましたか」については、「大いに得るものがあった」が8名、「得るものがあった」が13名、「あまり得るものはなかった」と「全く得るものはなかった」は0名であった。また、設問2、「今回の授業で得たものは何ですか（複数回答可）」については、①知識が16名、②「体力・健康についての認識」が8名、③「チャレンジ力」が10名、④「忍耐力」が14名、⑤「コミュニケーション力」が6名、⑥「新たな人生観」が4名、⑦「その他」が1名であった。

この他、自由回答欄に以下のような記述があった。

- ・普通の授業では体験できないような達成感を得ることができた
- ・講義で知識を得たあとに歩き遍路をしたのでいろいろよくわかった。
- ・歩きのきつさを忘れるため人と話をせざるをえないので、新しい友人ができた。
- ・今まで話をしたこともない人と話ができ仲良くなり、気持ちよく歩くことができた。
- ・一般的に持っていた歩き遍路のイメージと実際は違っていたので、とてもためになった。
- ・道を歩くお遍路さんに対しての興味・関心が高まった。機会があればお接待をしたい。
- ・遍路の知識を手に入れることができ、今後の愛媛（四国）の売り出しに協力できそうです。

8. 到達目標の達成状況

上記のアンケート調査の結果、および授業終了後に提出したレポートの内容などからみて、到達目標は十分達成していると考えられる。

9. 今後に向けた展開

アンケート調査の結果やレポートの内容を詳細に分析し、授業内容の改善につとめたい。

10. その他（関連資料など）

平成24年度共通教育科目歴史の多様性「遍路を学び、歩く」受講生レポート集

科目番号：10279 20281	科目名：異文化へのまなざし
担当教員：田中 寿郎	
開講時期：前期 金曜3限 後期 火曜1限	履修者数：38名 31名

共通教育「創生授業」実施報告書

代表教員 所属 工学部
氏名 田中 寿郎

1. 授業データ

開講時期 : 平成24年度 前学期
時間割番号 : 10279
科目名 : 異文化へのまなざし
授業題目 : Issues in Research Today (in English)
履修者数 : 38

開講時期 : 平成24年度 後学期
時間割番号 : 20281
科目名 : 異文化へのまなざし
授業題目 : Challenges and Issues in Research Today (in English)
履修者数 : 31

2. 授業の目的

本授業の目的は、

- ①英語を用いた講義を提供すること
- ②英語で考え、議論し、自分の考えを発表する体験をさせること
- ③教員に、英語で講義する体験をする場を提供すること
- ④知識を伝達する講義ではなく、学生に自ら考え、議論し、発表させる「アクティブラーニング」のトレーニングの機会を提供すること

などを目的として実施した。

3. 授業の到達目標

You will gain knowledge of what kinds of problems researchers are trying to solve today.
You will be able to increase your English vocabulary.

4. 共通教育の理念・教育方針に関わる項目 (対応する項目をチェックして下さい)

基本姿勢 コミュニケーション力 基本技能 基礎知識 基礎的思考力

5. 授業概要

This will be an omnibus-style class held in English with a different professor from a different field teaching one class each. Students will be introduced to the current challenges and issues in the fields of science, agriculture, engineering, language, political science and economics.

6. 授業の進め方と特に留意した事柄

講義の進め方

- ①オムニバス形式であるので、講義 1 週間前までに担当教員に Prep-sheet を作成してもらう。
ここには、授業の概要、授業までに調べておくこと、考えておくこと、議論すべき点を明記
- ②この Prep-sheet を Moodle を使って、学生に提示する。
- ③学生は Prep-sheet を予習に使い、Moodle 上の Forum で、あらかじめ与えられたテーマについて学生や担当教員と議論し、講義までの 1 週間の間で理解を深めておく。
- ④講義当日は約 40 分の講義と 40 分の議論やワークショップを行い、講義の内容について、より深い理解を目指す。
- ⑤講義後、授業についてアンケートに記入する。
- ⑥授業の中間と期末に、それぞれ印象に残った講義の一つを選び、内容などについてレポート（英文）を作成する。

7. 学生の反応

アンケートの結果を示す。強い肯定が 5、強い否定が 1 として学生が点数をつけ、その平均を示す。

1. I put a lot of effort into this course. (私は努力した。)	3.5
2. I learned in this course. (勉強になった。)	3.8
3. I found the course in general to be interesting. (この授業は全体的に興味深かった。)	4.1
4. The content level was appropriate. (内容の難易度は適切であった。)	2.8
5. The course was well-organized. (この授業はよく構成されていた。)	3.6
6. I would recommend this course to other students. (他の学生にこの授業を薦めたいと思う。)	3.6
7. Moodle was helpful. (ムードルは役に立った。)	4.1
8. The classroom and facilities were good. (教室と設備は良かった。)	4.0
9. The time (Friday 3rd period) was good. (授業の時間帯が良かった。)	4.0

ムードルの利用について、上記の感想の理由

- ・ムードルは使いやすかったのでよかった。
- ・もっとリアルタイムにお互いの意見をやり取りできるように時間帯をして皆がさんかすればええ思いました。
- ・予習によって授業の端に触れることができたので、すこし授業が受けやすかった。
- ・すごく分かりやすかった。レポート提出が少しだけ難しい。

- ・途中からただ意見を出すだけになってしまっていた。
- ・ムードルの予習で授業の内容の理解がしやすくなったから
- ・授業の予習ができるし、他の人の意見を見ることができるから。
- ・宿題等をムードルで行えたからです。
- ・ムードルのおかげで授業の内容は大体把握できた。
- ・不具合が発生するのでムードルでのレポート提出は難しかった。

学生の感想

- ・英語のみで会話するのがよかった。
- ・英語を耳に出来、また英語で発言することで初めて英語してるな～思えました。
- ・毎回先生が変わり新鮮な気持ちで授業に臨めることです。
- ・普段の授業では聞けない分野のお話を聞くことができてよかった。
- ・実際に抗議などで使われる生の英語に触れることができた点
- ・ネイティブな英語に触れることができた点
- ・英語を話したり、聞いたりする機会があまりないので、英語の説明などを聞くことができて非常によかった。
- ・いろいろな先生が来て専門的な従業を行ってくれてとても勉強になったと思います。
- ・普段かかわりないことを知れたこと。
- ・いろいろなテーマについて学習できる。
- ・全体的にとってよかった思えた講義でした。
- ・難しい分野もあったが、自分の学科では聞くことのできない話が聞けて勉強になった。
- ・英語で学ぶということの難しさを感じた
- ・英語をもっと聞き取れるようになりたいと思った
- ・他の授業と違い、専門的な英語の知識を学ぶことができてよかった。ゲストで講義に来てくださる先生方も面白い人ばかりで、毎回楽しんで授業に取り組むことができた。
- ・勉強になりました。
- ・こういう講義もよかったです

8. 到達目標の達成状況

学生のアンケート結果から、十分に目標を達成できたと考える。

9. 今後に向けた展開

共通教育科目として、英語を用いた講義を試行している。学生の学ぶ意欲にこたえることができていると思われる。創生授業として開講して5年になる。学生の英語で学びたいという欲求を強力に感じるとともに「アクティブラーニング」を体験した学生の成長は目覚ましいものがある。

科目番号：10288	科目名：文学の世界
担当教員：佐藤 栄作	
開講時期：前期	金曜3限 履修者数：29名

共通教育「創生授業」実施報告書

代表教員 所属 教育学部
氏名 佐藤 栄作

1. 授業データ

開講時期：平成24年度 前学期
時間割番号：10288
科目名：文学の世界
授業題目：愛媛大学のルーツ「章光堂」を探る
履修者数：29名

2. 授業の目的

本学唯一の戦前の建築物である「章光堂」（旧制松山高校講堂、現教育学部附属中学校講堂）を通して、愛媛大学のルーツを探る。有形文化財である章光堂の建物としての特性と高い価値、歴史的に果たしてきた役割、ここで学んだ先輩たちへの理解を深め、愛媛大学生としての誇りと愛校心を培う。また、文化財保存・活用について考えられるようになる。

3. 授業の到達目標

1. 文化財としての章光堂、本学の前身の一つである旧制松山高校、また本学の誕生について、本学学生にふさわしい基礎的な知識を身につける。
2. 章光堂の文化財としての意義、果たした歴史的役割、章光堂で学んだ先輩について知り得た知識を他者に説明することができる。文化財保護・活用について、大学生らしい行動ができる。
3. 愛媛大学生としての誇り、愛校精神、文化財を大切にす態度を身に付ける。

4. 共通教育の理念・教育方針に関わる項目（対応する項目をチェックして下さい）

基本姿勢 コミュニケーション力 基本技能 基礎知識 基礎的思考力

5. 授業概要

まず、旧制高等学校を中心に戦前の教育制度について概説し、「章光堂」のミニチュアと愛媛大学の歴史の展示がある愛大ミュージアムを見学した。次に、いくつかの資料を配付し、現在の教育学部附属中学校講堂「章光堂」が本学の前身の一つである旧制松山高校の講堂であり、本学の唯一の戦前からの建築物として国の有形文化財に指定されていること、そして章光堂は大正時代から現在まで90年にわたって使用され続け多くの先輩が学び（例えば文学関係では、芝不器男、中村草田男、早坂暁らを輩出した）、文化の発信拠点として地域に貢献してきたことを講義した。実際に「章光堂」見学も実施した。次に、

昭和23年の最期の松山高校生を描いた映画「ダウンタウンヒーローズ」を図書館で鑑賞した。また、ちょうどその当時学生だった卒業生秦敦氏に大学へお出でいただき、当時の松山高校と学校生活について受講生によるインタビューを行った。これらを受け、特に興味を持った領域（松高の歴史、「章光堂」で学んだ偉大な卒業生、建築物としての「章光堂」、「章光堂」の活用）についてグループでさらに調査し、知り得た知識や章光堂活用案を発表し合った。

6. 授業の進め方と特に留意した事柄

①「現物を見る」、②「資料をしっかりと読む」、③「仲間とともに活動する」に留意した。

①「現物を見る」として、以下を実施した。

- ・愛大ミュージアム見学
- ・「章光堂」見学
- ・映画「ダウンタウンヒーローズ」鑑賞
- ・秦敦氏（旧制松山高等学校第30回卒業生）へのインタビュー

②「資料をしっかりと読む」に関しては、担当教員が配付した資料の他、本学図書館、秦氏からいただいた松高創立65周年記念誌『真・善・美』、同70周年記念写真集『暁雲こむる』を活用した。

③「仲間とともに活動する」については、興味関心の近い5つのグループを作り、グループ活動の時間を確保し、グループ単位で、中間発表とまとめの発表とを実施した。

7. 学生の反応

担当者は、昨年度まで附属中学校の校長を兼任していたため、「章光堂」への思い入れが極めて強く、この授業にはつつい力が入り過ぎてしまった。担当者の思いが、学生にしっかりと伝わったところと、担当者の空回りに終わった部分とがあったように思う。

「章光堂」見学では、愛媛大学にこのような美しい建物があつたのか多くの学生が驚いていた。昭和23年当時の最期の旧制高校生を描いた映画「ダウンタウンヒーローズ」を見て、60年での学生・学生生活の変化に戸惑うとともに、時代を超える青春・恋愛に感情移入するものもあつた。まさにその映画の中の学生であつた秦氏へのインタビューは、映画で描かれた生活が本当なのか作り話なのかという点に集中し、多くが事実だという回答に驚いていた。グループに分かれての発表は、深まつたものにならなかつた。担当教員の指導力不足である。しかし、課題についての調査、検討、プレゼンの経験は、今後の専門等での授業の練習になつたと思う。

8. 到達目標の達成状況

最後の発表後のアンケートで、①「章光堂」について知らない人に説明できるか、②愛媛大学の前身の旧制松山高校について知らない人に説明できるか、の二つをたずねた。

①「章光堂」については、5分くらい9名、2分くらい17名、1分以下1名。

②旧制松山高校については、5分くらい9名、2分くらい15名、1分以下3名。

自分のグループで調べたことを中心にという注がつく学生が多いが、それでも0からの出発だつたから、まあまあというところか。

9. 今後に向けた展開

この授業は、後から実施を認めていただいたものであつたため、「文学の世界」の一つとなり、内容と一致しないところがあつた。こうした、大学の歴史に関わる共通教育の授業は、あつてしかるべきだと思ふが、今回と同じ内容で毎年開講すべきかどうかは判断が難しい。というのは、新入生が、旧制高校とは何かから章光堂の建築物としての価値、その有効利用まで学習し考えるのは、盛りだくさん過ぎるかもしれない。担当者も、それらの専門家ではない。しぼるか、大きくするか、なお考慮中である。

10. その他（関連資料など）

ご協力いただいた秦氏より、松高創立65周年記念誌『真・善・美』、同70周年記念写真集『暁雲こむる』を献本いただいた（佐藤研究室）。

科目番号：10297 科目名：異文化へのまなざし
担当教員：秦 敬治
開講時期：前期 集中 履修者数：11名

共通教育「創生授業」実施報告書

代表教員 所属 教育・学生支援機構 教育企画室
氏名 秦 敬治

1. 授業データ

開講時期 : 平成 24 年度 前学期
時間割番号 : 10297
科目名 : 異文化へのまなざし
授業題目 : 国際会議参加・準備を通じたグローバル・リーダーシップ実践
履修者数 : 11名

2. 授業の目的

異文化間交流に求められるリーダーシップを身につける

3. 授業の到達目標

- (1) 異文化間交流に求められるリーダーシップ能力がどのようなものかについて説明することができる。
- (2) 愛媛大学における学生支援の取り組みについて説明することができる
- (3) 自分自身（背景、興味・関心、将来のこと）について述べることができる
- (4) 相手の立場や枠組みを尊重した上で、自分の意見や気持ちをその場に適切な言い方で表現することができる
- (5) 異文化環境において、愛媛大学または日本の学生の代表としてふさわしい立ち居ふるまいで他者と接することができる
- (6) (1) から (5) を基礎的な英語表現を用いて行うことができる

4. 共通教育の理念・教育方針に関わる項目（対応する項目をチェックして下さい）

基本姿勢 コミュニケーション力 基本技能 基礎知識 基礎的思考力

5. 授業概要

「第13回 APSSA（アジア太平洋学生サービス協会）国際大会（フィリピン）」に参加し、発表・討議や他国の学生・教職員との交流を通して異文化間に求められるリーダーシップを身につける。3ヶ月に渡る事前研修では、発表・討議を行うために「グローバル市民」について理解を深める為のボランティア活動、英語での論文執筆、コミュニケーション研修、国内の他大学生との討議を行い、スキル、知識・理解面、態度面の養成を行う。

6. 授業の進め方と特に留意した事柄

本授業は学部、学年が異なるメンバーが、国際学会参加のために、課題をこなしながら渡航の準備を進める内容である。その為 1) 学生の動機付けの維持と、2) リーダーシップについて活動プロセスで考えさせるために、異なるメンバーとの協同が求められる機会を多く提供することに特に留意した。

1の動機付けの維持のためには、英語に慣れ親しむためのコンテンツを facebook で共有し、授業内でそれについて話し合うことなどをした。また、個人・ピア・教員を通した振り返りを適宜行い、学生が自己の成長を確認することの促進や、課題に取り組む上での障壁や、心情などについての把握に努めた。

2の主な取組みには、受講者の中で全体リーダー、発表係、渡航係、議事録・報告書作成係を決め活動を行ったことがある。授業時間外学習や他の授業・活動を抱えながら係の仕事をこなすことは容易ではなく、学生は時に不満を漏らしぶつかることもあった。それらを踏まえ、改めてチームとしての目的とバリュー（行動指針）を定め、活動内で問題があった場合は、授業の目的、チームとしての目的とバリューに立ち返って話し合い活動を進めた。

7. 学生の反応

本授業受講学生の学習意欲にはめざましいものがあった。

本授業の主たる課題は「グローバル・シチズンシップ」というテーマについての英語でのプレゼンテーションを準備することであった。その為に、まずは自分たちなりの定義付けを行うことを課題とし、自主的に授業時間外に10時間以上に及ぶ議論を行った。また、プレゼンテーションのコンテンツとして取り上げた被災地支援について整理する中でぶつかった原発問題や、大会開催地であるフィリピンの貧困問題について理解を深めるため、学内の教員等に依頼し、勉強会を複数回実施した。また、大会参加国すべての文化背景を分担して調べた。この様子は愛媛新聞でも取り上げられている。これらの成果として、メディアの情報にとらわれず、自分自身の考えを整理することの大切さや他者と納得するまで議論する姿勢について学んだことが伺える。

現地においては、英語力では他国の学生には及ばない場面も多々あったが、プレゼンテーションも各国の参加学生・教職員より高い評価を得た他、交流・活動場面においても、それぞれが異なるグループの中心的存在として活躍している姿が見られた。

8. 到達目標の達成状況

個人差はあると思うが、掲げている到達目標は概ね達成されたことが、活動態度、レポート記述、振り返りでの発言から伺える。

9. 今後に向けた展開

APSSA（アジア太平洋学生サービス協会）国際大会は2年に一度開催されており、次回は2014年に京都での開催を予定している。そのため、京都大会において、学生カンファレンスのセッションを企画・運営・実施することを課題とした授業を開講したいと考えている。

科目番号：10317 科目名：くらしと政治

担当教員：檜林 建司

開講時期：前期 火曜1限 履修者数：25名（うち附高生6名）

共通教育「創生授業」実施報告書

代表教員 所属 法文学部総合政策学科

氏名 檜林建司

1. 授業データ

開講時期：平成24年度前学期

時間割番号：10317

科目名：くらしと政治

授業題目：難民問題についてのワークショップ

履修者数：25名（うち附高生6名）

2. 授業の目的

難民問題を題材として、「弱者」とされる人々と主体的に関わるために必要な基本的素養を身につける。

3. 授業の到達目標

- 1 難民問題につき、ごく基礎的なレベルで、知識と情報収集能力を身につける。
- 2 難民のおかれている状況を理解し、対等な人間として、彼らに学びながらそのニーズに応えようとする姿勢を身につける。
- 3 ニーズに応えるため具体的に何をなすべきか、他者と協力し多角的に検討しながら立案する基礎的な能力を身につける。
- 4 自らの考えを魅力的かつ説得的に発表するための基礎的な技法を身につける。

4. 共通教育の理念・教育方針に関わる項目（対応する項目をチェックして下さい）

基本姿勢 コミュニケーション力 基本技能 基礎知識 基礎的思考力

5. 授業概要

1 ガイダンス

*歓迎のあいさつと担当者自己紹介／授業の枠組みや方法の説明／事務的事項の処理

2 ウォーミングアップ

*受講生の自己紹介／ワークショップについての説明／難民の写真を見て感じたことや考えたことを、グループ毎に漢字1文字で表し、理由を付して発表する。

3 難民について見る・聞く

*難民の現状をとりあげたビデオを視聴し、グループ毎に質問や感想をまとめて発表する。

4 難民に関する基礎知識

*グループワークで、難民に関するごく基礎的なクイズに取り組んだ後、得られた知識から何を感じるか考えるかをまとめて発表する。

5 難民問題に対する国際社会の取り組み

*難民条約や国連難民高等弁務官事務所の活動に関するレクチャーを聞き、難民を取り巻く国際社会の現実について考える。

6 日本の総理大臣への書簡案を作る

*国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）への協力強化を要請するための総理宛の書簡案を作る。

7 日本の難民受け入れ体制

*日本の難民受け入れ体制を他国と比較しながら、難民受け入れに関する様々な課題について考える。

8 ディベート準備

*難民に関する具体性のある問題を課題として示し、簡単なレクチャー、ブレインストーミング等を行った後、グループ毎の打ち合わせをする。

9 ディベート

*前回示した課題につき、ディベートを行う。

10 子どもである難民の教育面におけるニーズの把握

*難民キャンプにある学校の実践例等を参考にしつつ、子どもである難民の教育面でのニーズについて、グループ毎に考えて発表する。

11 子どもである難民向けの学校作りに関する骨子立案

*前回の成果をもとに、難民である子どものための学校作りの計画の骨子を、グループ毎に考えて発表する。

12 子どもである難民向けの学校作り計画の発表準備

*発表に向けて、グループ毎に準備をする。

13 子どもである難民向けの教学校作り計画の発表（1）

*できれば開かれた場で、グループ毎にプログラムを発表する（3グループ分）。

14 子どもである難民向けの学校作り計画の発表（2）

*できれば開かれた場で、グループ毎にプログラムを発表する（3グループ分）。

15 まとめ

*受講者各自が自分なりのまとめを口頭で発表し、レポートとして提出する。

6. 授業の進め方と特に留意した事柄

今回も高大連携科目の「フリーサブジェクト」にも当たっていたので、高校生がグループワークにとけ込みやすいように、柔らかい雰囲気作りに心がけた。また、「中間期ふりかえり」の実施やミニミニレポートに対する個別レスポンスなど、様々な形での受講生とのコミュニケーションに力を入れた。

7. 学生の反応

受講生間のコミュニケーションや前向きな学習態度については、概ね満足行くものだった。

8. 到達目標の達成状況

全体として、達成度には満足している。特に到達目標のうち「2」を強調することが、3にある「他者との協力」を、年齢や専門を超えて達成することにつながった。

9. 今後に向けた展開

これまでの成果をもとに、創生授業を「卒業」し、一般の授業で認められる受講生数制限で、同様の授業を実施したい。専門基礎教育での「国際問題入門」では、SAの助けを借りつつ75～100人規模で、そのような授業を実施する経験を積んだ。

10. その他（関連資料など）

附高生が、インドネシア研修や定期テストで2回休まざるを得なかったのが、少々残念である。

科目番号：10374	科目名：自然の法則
担当教員：大田 伊久雄	
開講時期：前期 集中	履修者数：23名

共通教育「創生授業」実施報告書

代表教員 所属 農学部・森林資源学コース
氏名 大田 伊久雄

1. 授業データ

開講時期 : 平成 24 年度 前学期
時間割番号 : 10374
科目名 : 自然の法則
授業題目 : 日本の森から世界の森へ ―持続可能な森林・林業そして社会とは―
履修者数 : 23 名

2. 授業の目的

森林の効用は大別すると、地球環境改善機能、地球環境保全機能、地域環境保全・改善機能、人間性回復機能等に分けられる。21 世紀の資源・環境問題を考えると、森林・木材の位置づけは新たなものとなる。特に、二酸化炭素吸収固定性や石油代替性、人間性回復等の機能が重要視されるようになってきた。もっとも、森林はこれらの機能を個別に持つのではなく、併せ持っていることを認識することが大切である。この授業では、これら森林の多くの機能を演習林における野外活動を通して理解し、日本そして世界規模の資源・環境問題の解決策を追求することを目的としている。

3. 授業の到達目標

- ・ 日本および世界の森林の現状と課題について理解することができる。
- ・ 森林踏査を通して、森林のもつ多様性について調べ、理解することができる。
- ・ 林業施業を通して、森林管理の重要性を知る。
- ・ 林内での作業を通して、仕事の道具を使えるようになる。
- ・ 森林・資源を維持・収穫するのに必要な労力を自ら経験し理解することができる。
- ・ 共同生活を送る上でのルールを体得することができる。
- ・ グループワークを通してコミュニケーションのスキルを身につけることができる。

4. 共通教育の理念・教育方針に関わる項目（対応する項目をチェックして下さい）

基本姿勢 コミュニケーション力 基本技能 基礎知識 基礎的思考力

5. 授業概要

履修者はグループに分かれて、2泊3日の日程で森林・林業体験をとおしてトピックに関連した講義と実習に参加する。最終日には、グループごとに成果を発表する。

前半：農学部附属演習林実験林内の踏査を行い、人工林と天然生林の相違、森林植物等の生物多様性

についての観察と地図読みスキルの獲得。

中盤：同実験林内にて、人工林の保育に必要な不可欠な森林施業（下刈り・枝打ち・間伐）を体験し、人工林の維持管理に必要な技術を体得する。

後半：実習中に体験した事柄と、日本および世界の森林の現状について講義から得た知識をベースに、各グループに与えられる森林問題をテーマにした課題についてその問題の解決方法についてグループワークを行い、その成果の発表とその結果を受けたディベートを実施する。

6. 授業の進め方と特に留意した事柄

農学部附属演習林に泊まり込んでの2泊3日の集中講義であり、昼間は森林踏査や森林施業、夜は講義とグループ学習というかなりハードなスケジュールとなっている。夏の森林内にはマムシやスズメバチなど危険な動物も多く、また学生達が日常生活ではあまり体験しないような急峻な斜面を登る場面も少なくない。この授業では、まず初めにそうした危険に対して自ら五感を使って察知し回避する心構えを教える。野外活動中は、教員・技術職員・TAの連携を密にしつつ、体力的に厳しそうな学生には十分なサポートをするよう心がけた。

講義では、全体を4つのグループに分けた上でそれぞれに課題を与え、ディスカッションを通して自分達で考えることに重点を置いた。初日および2日目の夜を準備期間として、最終日にはグループ対抗のディベートを行い、学習成果の可視化を試みた。

さらに、講義終了後3週間後までにレポートの提出を義務付け、授業で体験し学んだ森林・林業に関する知識を再確認する機会を与えた。

7. 学生の反応

森林という存在に対する見方が大きく変わったという感想を述べる学生が多かった。これは例年ある程度予想される反応であるが、現代の大学生がいかに自然体験に乏しいのかを示しているという意味では問題である。授業内容に関しては、肉体的にきつかったという意見が大半を占めたが、やり遂げた達成感に言及する学生も多かった。グループでの学習についても、他学部学生の自分とは違った考え方に触れられた点や、他人と協力し合いながら主張をまとめ上げていくプロセスなどに対して好感触を持った学生が多いようであった。

8. 到達目標の達成状況

わずか3日間の集中講義で、到達目標に掲げたすべてが容易に達成できるはずはないが、学生達の意識の変化には大きなものがあり、特に1回生の受講が多いことを考えると今後の大学生活の中で生かしていけるヒントになるものを得ることができたのではないかと。具体的には、森林管理技術の重要性、世界の森林問題への視点、人と自然との関係性、グループでのコミュニケーションの方法などである。

9. 今後に向けた展開

毎年授業の最後に、この授業は今後とも続けていく値打ちがあるかどうかを尋ねているが、ほとんど例外なく続けるべきだという回答が得られる。ただ、農学部附属演習林では農学部生を対象にした実習や公開講座など夏期休暇中の授業が多く、この授業にかかる労力（日程調整・事前準備・学生ガイドン

ス・教員と技術職員の負担・食事の手配等)は少なくない。開講時期も含めて今後の授業形態には検討すべき点が少なくないが、学生からの期待の声(後輩にもぜひ受けさせたい…)は重大に受け止めている。

10. その他(関連資料など)

松山大学との単位互換授業に指定されており、本年度は2名の希望者があったが実習直前に都合が悪くなって参加できなかったことは残念であった。

科目番号：10375	科目名：自然の法則
担当教員：中川 祐治	
開講時期：前期 集中	履修者数：23名

共通教育「創生授業」実施報告書

代表教員 所属 総合情報メディアセンター
氏名 中川祐治

1. 授業データ

開講時期：平成24年度 前学期（集中）

時間割番号：10375

科目名：自然の法則

授業題目：シェアリングネイチャー

履修者数：23名

2. 授業の目的

環境教育の一分野である自然認識学の立場から、五感を使って自然を直接体験することで自然を共に分かち合うことを学ぶ。

3. 授業の到達目標

- (1) ネイチャーゲームの目的を説明することができる。
- (2) 自然を直接体験する活動に参加することができる。
- (3) 新しいアクティビティを創作し実施することができる。

4. 共通教育の理念・教育方針に関わる項目（対応する項目をチェックして下さい）

基本姿勢 コミュニケーション力 基本技能 基礎知識 基礎的思考力

5. 授業概要

ネイチャーゲームは、1979年米国のナチュラリスト、ジョセフ・コーネル氏により発表された五感を使って自然を直接体験するプログラム（野外活動）である。ネイチャーゲームの目的は「自然への気づき（Nature Awareness）」で、「自然への気づき」とは五感で自然を感じ、体と心で直接自然を体験することによって、自然と自分が一体であることに気づくことである。授業では、ネイチャーゲームのアクティビティを屋外で実際に体験するとともに、理論的背景を講義する。

6. 授業の進め方と特に留意した事柄

- ・ 受講生は Facebook に登録し、事務的連絡や参加学生同士の情報交換に利用している。
- ・ 初日の夕食を野外炊飯とすることで、受講学生間の交流を図っている。
- ・ 大洲青少年交流の家のフィールドを有効に使うため、TAの学生たちと下見を含めた事前準備を綿密に行っている。

- ・ 教室での講義と野外活動を交互に行うことで、緊張感を保ちつつネイチャーゲームを体験することができるようにした。

7. 学生の反応（最終日の自由記述アンケートより抜粋）

- ・ 今回の集中講義を通して、自然と触れ合うことの楽しさ、そして触れ合う中で周りの人々との距離の縮め方も知る事ができ、貴重な体験ができたなと思います。
- ・ こんなに自然と触れ合い続ける3日間は恐らくこれまでも、またこれから先もないと思われるので、貴重な日々を過ごすことができました。
- ・ 普段は愛媛の中でも都会である松山で日々を過ごしているため、常に自然を感じる事ができません。ですが、この講義を通して、松山市の中の自然をもっと探求したいという気持ちが強くなり、自然が以前よりもより一層大好きになりました。
- ・ 3日間の集中講義を通して、今までは学ぶことのできなかつた多くのことを体験する事ができました。
- ・ 一つのアクティビティでも本当にいろいろなことが考えられてできあがってるんだと思い、驚きました。
- ・ 今回ネイチャーゲームを初めて体験したのですが、楽しいだけでなく環境教育というねらいも含まれていることで、当初の私の目的も果たしつつ、学生として考えさせられる機会にもなりました。
- ・ 自然との本当の意味での関わり方を学べ、自然の魅力といったものをわずかながら感じる事ができたと思います。

8. 到達目標の達成状況

受講した学生たちは、ネイチャーゲームを通して自然に直接触れ、その豊かさを体感した。また、最終日には新しいネイチャーゲームのアクティビティを各グループで創作し、それを実施することでコミュニケーション力も養う事ができた。

9. 今後に向けた展開

毎年抽選を行ない受講生を決定しているが、今回は医学部から参加希望者が殺到した。単なる単位取得目的でなく、やる気のある学生の参加を希望したい。

10. その他（関連資料など）

特になし

科目番号：10390	科目名：生命の不思議
担当教員：上野 秀人	
開講時期：前期 集中	履修者数：27名

共通教育「創生授業」実施報告書

代表教員 所属 農学部
氏名 上野 秀人

1. 授業データ

開講時期 : 平成24年度 前学期 集中
時間割番号 : 10390
科目名 : 生命の不思議
授業題目 : 農に親しむ
履修者数 : 27名

2. 授業の目的

1. 農学部以外の学生に、農業体験を通じて、「農業とはどのようなものか」を感じ取ってもらう。
2. 農業は単に食糧生産に重要な役割を果たしているばかりでなく、保水機能、災害防止、景観保全、生物多様性等、数多くの「多面的な機能」があることを知り、「農業と自然環境の関わり」を理解することにより、「フィールドサイエンスの基礎知識」を得る。
3. 土に触れ、農作業を行い、「生命を生み出し、養う」体験を通じて、「農の重要性」を5感で理解し、農に親しむことができるようになることを目的としている。

3. 授業の到達目標

1. 農作集体験を行うことで「農業」や「自然」を5感で感じることができる。
2. 「農業」という産業の論理と技術進歩を見聞きすることで、「農業」の重要性が理解できる。
3. フィールドサイエンスの講義を受け、環境保全型農業の現場で実習することにより、「農業」と「環境」の関わりが理解できる。

4. 共通教育の理念・教育方針に関わる項目（対応する項目をチェックして下さい）

■基本姿勢 □コミュニケーション力 ■基本技能 ■基礎知識 □基礎的思考力

5. 授業概要

農学部附属農場で夏期休業中(9月中下旬)に2泊3日で集中的に行う授業である。昼間は5名の教員が半日ずつ担当し交代して行う。技術職員6名も実習補助を行う。1日目の夕方には、食品加工の一つとして餅つきも行う。実習は、基本的に内容説明と諸注意をし、実習の意義づけを行ってから、水田、果樹園、畑、家畜舎など、フィールドでの実習を実施する。さらに、夜間は2名の教員が90分間、『私の研究と農業生産』と題した授業を行う。

実習内容は、天候や作物生育ステージにより変更することもあるが、概ね、水稻生育調査、柑橘園管理、柑橘品質測定、野菜収穫や出荷調整、除草管理作業、肉牛の体格・体重測定、肉牛のブラッシング

や畜舎整理、自然観察（動植物）、土壌の観察や簡易分析を行っている。

6. 授業の進め方と特に留意した事柄

- ・農学部以外の学生が対象であるため、わかりやすく、興味深い説明をするように留意している。
- ・本授業は、農学部の教員6～7名、技術職員6名、臨時職員1名が24時間体制で実習を行うものであり、関連分野の教職員が総力を挙げて本授業に取り組んでいる。
- ・実習内容は、水稻、畑作、園芸、果樹、畜産、自然観察など幅広い内容になるように講師を設定しており、日本農業の各分野について触れられるように留意している。
- ・附属農場では「環境保全型農業プロジェクト」が行われており、化学肥料や農薬による環境汚染を低減し、生態系を維持改善する取り組みについても説明を行い、学生に「自然保護」に対する取り組みの重要性を理解してもらうように、留意している。

7. 学生の反応

- ・毎年、本授業は、学生からの人気が非常に高く、申し込み受付には列ができ、即日のうちに受講者が決まってしまうほどである。
- ・学生からの評価も非常に高い。また本授業終了時に学生が提出したレポートのほとんどは、「他授業では学べない多くのことを学んだ。」と書かれており、学習効果が非常に高いと考えられる。本授業の受講学生は、農学部学生よりむしろ、積極的に実習に取り組んでいる姿が観察される。

8. 到達目標の達成状況

1. ほとんどの受講学生は、都市部に居住し、「農業」はもちろんのこと、「自然」を5感で意識的に感じる機会がないため、新鮮な発見が多いことをレポートで述べており、目標は達成された。
2. 「農業体験がない」、「実家が農業をしても深く考えたことがない」学生がほとんどであり、産業としての農業がどのように実際行われているかを体験し、「農業者の苦労」、「農業は生命を生み出し、生命を養う」ことを改めて認識し、「農業の重要性」を感じ取っており、目標は達成された。
3. マメ科植物を使った無肥料栽培、生態系を活用した無農薬栽培技術を用いた作物栽培技術について理論を学び、現場を見ることにより、「農業」が「環境」に与える影響の大きさと「環境保全」の重要性を学んでおり、目標は達成された。

9. 今後に向けた展開

- ・農学部以外の学生は、附属農場を利用して卒業研究や修士、博士論文を行うことはほとんどない。そのため、本授業を受講した学生には、研究材料として農場が利用可能であることを説明し、施設の有効利用に向けた発信をしたい。
- ・平成24年度は、95100円の予算を受けており、その75%がバス代、8%が寝具のクリーニング代であった。バス代は、大学のバスを利用することにより、経費は不要となる。また寝具クリーニング代も、学生負担とすることにより、経費は不要となる。これにより、実習で必要な2万円程度の消耗品（植物栽培用具、軍手、長靴など）だけで実習は行えるようになる。

10. その他（関連資料など）

特になし。

科目番号：20263	科目名：ことばの世界
担当教員：清水 史	
開講時期：後期 水曜2限	履修者数：29名

共通教育「創生授業」実施報告書

代表教員	所属	法文学部人文学科
氏名		清水 史

1. 授業データ

開講時期：平成24年度 後学期

時間割番号：20263

科目名：ことばの世界

授業題目：大学生のための実践的日本語教育

(Japanese expression method of the university students)

履修者数：29人

(法文学部人文1人、教育学部芸術文化1人、理学部化学1人、工学部20人<機械6人、電気電子2人、機能材料5人、応用化学2人、情報5人>、農学部6人<生物資源4人、海洋生産2人>)

2. 授業の目的

日本語の様々な特性を理解することによって、日本語の適正な使い方を習得し、実践に生かすことを目的とする。

3. 授業の到達目標

本授業の到達目標は、以下の4点である。

- ①大学生としてふさわしい日本語表現力を身につけている。
- ②所与の課題を達成する中で、論理性と批判的思考力を養うことができる。
- ③情報収集とリソースの組み立て方を身につける中で、自己の意見を確立できる。
- ④課題発表を通してコミュニケーション力を高めることができる。

4. 共通教育の理念・教育方針に関わる項目 (対応する項目をチェックして下さい ※■で表す)

基本姿勢 コミュニケーション力 基本技能 基礎知識 基礎的思考力

5. 授業概要

授業では、情報収集・発信の能力、記述・論述の能力、対話・討論の能力を高めるために、グループを中心として様々な課題に取り組み、考察し発表した。

全15回の授業の担当は、以下の通りである。

第1・2回 清水 史 (法文学部人文学科教授)

第3～6・15回 秋山 英治 (法文学部人文学科准教授)

第7～10回 谷口 浩一（附属高等学校教諭）

第11～14回 白石 裕司（国際教育支援センター非常勤講師）

各回の授業内容は、以下の通りである。

第1回 はじめに（導入編）

担当：清水史（2012年10月3日実施）

- ①担当する教員の紹介をする。
- ②本講座の目的・ねらいを説明する。

第2回 大学生としてのプロトコルの習得・活用篇 担当：清水史（2012年10月10日実施）

- ①文の構造的欠陥のタイプと修飾句の語順及び読点の打ち方から、点検原則を確認させる。
- ②例文を点検、リメイクすることにより、文章におけるプロトコルを習得させる。

第3回 事実を正確に理解し伝達するためのスキル習得篇

担当：秋山英治（2012年10月17日実施）

- ①グループワークを円滑に行うために、学生同士に自己紹介をさせる。
- ②事実と意見の峻別、図（視覚情報）を文章で表現するときのポイントを確認させる。

第4回 事実を正確に理解し伝達するためのスキル活用篇

担当：秋山英治（2012年10月17日実施）

- ①例文「ドクターミス」から読み取れる情報を整理させる。
- ②説明文「だらりん怪獣」からの情報抽出と想像によるイメージ化から、言葉の特質と限界を認識させる。

第5回 資料を解釈し説明するためのスキル習得篇 担当：秋山英治（2012年10月31日実施）

- ①課題文を用いて、主張の把握と情報の分析をさせる。
- ②説得力を持たせるためのプロセスを踏まえた反論文を作成させる。
- ③「ののちゃん」の4コマ漫画を用い、起承転結の流れを想像し、4コマ目に入る台詞を考えさせる。

第6回 資料を解釈し、説明するためのスキル活用篇 担当：秋山英治（2012年11月7日実施）

- ①「ののちゃん」の例から、十分の考えを主張するには、根拠と客観的基準の重要であることを認識させる。
- ②「塩の移動」の例題から、問題解決のために必要なプロセスを押さえる。

第7回 情報を分析、評価し、論述するためのスキル習得篇

担当：谷口浩一（2012年11月14日実施）

- ①メディアリテラシーと情報解読のコンテキストを理解させる。
- ②ワークシートを用いて、文章から情報を収集し整理させる。

第8回 情報を分析、評価し、論述するためのスキル活用篇

担当：谷口浩一（2012年11月21日実施）

- ①情報の分析法を紹介し、効率よく正確に情報を整理させる。
- ②SWOT分析シートを用いて、「愛媛大学」を例にグループワークをさせる。

第9回 課題について、構想を立てるためのスキル習得篇

担当：谷口浩一（2012年11月28日実施）

①前時に作成した論述文の分析と注意点を確認させる。

②与えられたテーマに沿って情報収集をさせ、前時の反省点を踏まえ、小論文を作成させる。

第10回 課題について、構想を立て実践し、評価するためのスキル習得篇

担当：谷口浩一（2012年12月5日実施）

①論理構造とその組み立て方を認識させる。

②「トゥルーミンの三角ロジック」を中心に、論述のための構成要素を把握させる。

③「今後のエネルギー政策のあり方」というテーマで論述をさせる。

第11回 互いの考えを伝え合い、自らの考えを発展させるための実践

担当：白石裕司（2012年12月12日実施）

①留学生による日本文化に関するプレゼンテーションと、それに対する受講生の感想やアドバイスを発表させる。

第12回 互いの考えを伝え合い、自らの考えを発展させるための実践

担当：白石裕司（2012年12月19日実施）

①留学生による自由テーマのプレゼンテーションに発表と質疑応答。

第13回 互いの考えを伝え合い、自らの考えを発展させるための実践

担当：白石裕司（2013年1月23日実施）

①受講生が任意の新聞記事を留学生に対してプレゼンテーションを行う。

第14回 互いの考えを伝え合い、自らの考えを発展させるための実践

担当：白石裕司（2013年1月30日実施）

①留学生が日本語能力の到達度を確認するために受験する「BJT ビジネス日本語能力テスト」を体験させる。

第15回 振り返り

担当：秋山英治（2013年2月6日実施）

①全体の振り返りをさせる。

6. 授業の進め方と特に留意した事柄

授業を進めるにあたって特に留意したのは、以下の3点である。

①教員から一方的な解説を行うのではなく、学生が主体的に学んでいくことができるようなアクティブ・ラーニングを行う。

②グループ・ワーク（ペア・ワーク）を授業に取り入れ、与えられた課題をグループで考察し、発表するなどのピア・ラーニングを行う。

③学生に課す課題は、現実社会に基づいた考える力を養成する課題を取り上げ、課題発見解決能力の育成に努める。

7. 学生の反応

本授業の最後にアセスメント・シートを配布し、授業に対する受講生の反応を量った。そこでの主なコメントを以下に示す。

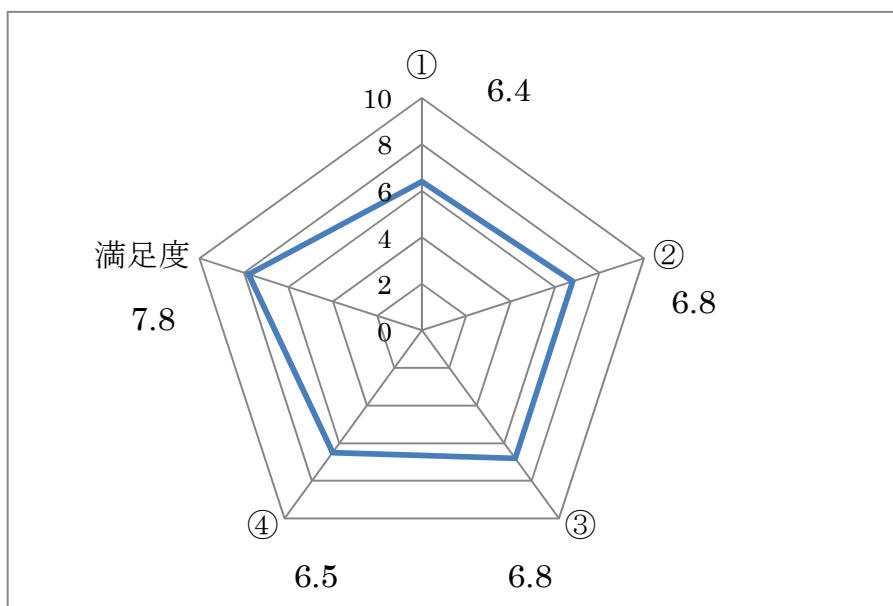
・論理的な文章の書き方や考え方がよくわかった。日本語のおもしろさや奥深い点も改めて見つけることができた。また、大人数の前で発表する機会は今まであまりなかったので、良い経験になった。

- ・論理の立て方の授業は非常に印象に残った。レポートを書くときに非常に役立った。また、留学生たちの発表を聞いて、得た情報や知識も多かった。
- ・すべての授業でコミュニケーションの大切さを学んできたが、特に班活動が心に残っている。自分の意見を他人に伝えることの難しさ、感じたことを言葉にすることの難しさが身にしみた。今回の授業がこれから活かされていくためにも、日本語検定を受検しようと思った。
- ・日本語で相手に自分の言いたいことを伝えることは大変なことだ。図形を相手に日本語で伝えるという授業が印象に残っている。なかなか、伝えることが難しかった。一番難しかったのは、文章を並べ替えて正しい文章に直すという授業だ。普段、何気なく使っている日本語だったが、きちんと順番があると分かった。
- ・毎回のようにグループ内ディスカッションを行い、それに参加して他人の意見を吟味しつつ自分の意見を述べることは初期よりもうまくなったと思う。
- ・この授業で印象に残ったのは、まず、秦の柄を文章で伝え、それを描く作業だ。一見簡単な柄でも、文章にしようとすると思っていただけよりも難しく、正確に伝えるということも、正確に捉えるということも難しかった。正確な情報の大事さがよく分かった。二つ目に、留学生が来てくれたことが印象に残っている。普段関わる機会があまりないので貴重な体験になった。
- ・この授業を通して、日本語の表現や伝えることの大切さ、難しさを感じた。普段、日本語を話すだけであったり、書いたとしてもメールやノート、レポートぐらいであり、正確な日本語を使う機会があまりなかった。だから、日本語で絵を伝える授業や4コマ漫画の4コマ目を考える授業はとても新鮮で良かった。今回学んだことを将来に活かしたい。
- ・普段何にも考えず使っている日本語について、詳しく知ることができて良かった。自分は極度の理系で、日本語にかかわらず、言語関係が本当に苦手だった。レポートの書き方も今ひとつだし、書き方を調べてもよく分からなかった。しかし、この授業のお陰でレポートの書き方は勿論、日本語について普段考えないことまで考えられた。

8. 到達目標の達成状況

本授業の最後にアセスメント・シートを配布し、以下の①～④の授業の到達目標4点及び授業の満足度について、10点満点をもって自己評価を行った。

- ①大学生としてふさわしい日本語表現能力を身に付けている。
 - ②所与の課題を達成する中で、論理性と批判的思考力を養うことができる。
 - ③情報とリソースの組み立て方を身に付ける中で、自己の意見を確立できる。
 - ④課題発表を通してコミュニケーション力を高める事ができる。
- ① ④の授業の到達目標及び授業の満足度の自己評価の平均は、以下の通りである。



到達目標①の自己採点平均が6.4点、到達目標②の自己採点平均が6.8点、到達目標③の自己採点平均が6.8点、到達目標④の自己採点平均が6.5点と、すべて6点以上となっており、まずまずの成果であったと思量される。

満足度の自己採点平均は、7.8点と好評であった。

以上より、所期の目標を達成したということができよう。

9. 今後に向けた展開

本授業は、高校教員と大学の教員が協働して実施する創生授業として本年度で2年目を迎えた。対象学生が理系学部中心ということから、授業を進めるにあたって種々の工夫を行った。学生の反応や学生の自己評価を見ると、学生自身が成長を感じることでできる授業となっており、一定以上の育効果をあげることができたと言える。

この授業成果については、平成25年度から共通教育で開講される「日本語リテラシー入門」に活かしていく予定である。

10. その他（関連資料など）

特になし

科目番号：20280 科目名：異文化へのまなざし

担当教員：村上 和弘

開講時期：後期 月曜3限 履修者数：28名

共通教育「創生授業」実施報告書

代表教員 所属 国際連携推進機構
氏名 村上 和弘

1. 授業データ

開講時期：平成24年度 後学期

時間割番号：20280

科目名：異文化へのまなざし

授業題目：共生世界で暮らすために--留学生支援を題材として--

履修者数：28名

2. 授業の目的

1. 留学生支援に関する基本的な知識を習得することを通じて、
2. 文化・社会の多様なあり方についての認識を深め、
3. 自己・自文化・自社会のあり方について再検討する。
4. 自らの生き方として「共生世界」を捉える視点を獲得する。

3. 授業の到達目標

日本語教育を含む、留学生支援に関する概要を理解し、説明できる。

日本語教育を含む、留学生支援に必要な最低限の知識を習得し、説明できる。

留学生支援に関する諸問題を「自らの問題」として捉えなおし、見解を表明できる。

4. 共通教育の理念・教育方針に関わる項目（対応する項目をチェックして下さい）

基本姿勢 コミュニケーション力 基本技能 基礎知識 基礎的思考力

5. 授業概要

教員3名による共同運営方式を取る。講義および演習形式を併用し、随時グループワークを行なう。

第1～2週は、留学生・定住外国人の現状、および支援の現状とあり方について概要を把握する。

第3～5週は、留学生支援の大きなトピックである「日本語」教育について概要を把握する。

第6～7週は、実践的スキルとしての「外国人に分かりやすい日本語」について学ぶ。

第8～10週は、言語を含む「文化」概念に視野を広げ、日本文化を題材として文化理解について考える。

第11週は、留学生・定住外国人支援の現状とあり方について、自らの問題として可能な方法を考える。

第12～15週は、それまでに得た知識を元に各自がテーマを決め、発表を行なう。

6. 授業の進め方と特に留意した事柄

本科目は複数教員が各自の専門分野を担当するオムニバス風の構成であるため、例年同様、全体像を常に意識しながら授業が進行するように留意した。コーディネータ（代表教員）は毎回授業を聴講し、

進行状況の把握と微調整を行なった。

授業スタイルとしては、全教員ともグループワーク・ディスカッションを主体とした授業となるようにした。

第12週～第15週は学生による発表にあてた。これは本授業のいわばキャップストーンである。発表の質を高めるため、発表準備が冬休み期間中にできるようスケジュールを設定しており、また、発表準備期間（＝冬休み期間）に先立ち、発表・引用のフォーマットを指導している。さらに発表の場においては、発表後の質疑応答を重視し、活発な質問がなされるように誘導を行った。（発表＝相互対話の糸口である。一方通行にならぬよう質問を積極的に行おう／質問＝反応がないほど発表者にとってつらいことはない、等々を予め説明）。

なお、例年は個人発表形式だったが、今年度は受講者数の増加に伴い、3名以下のグループ発表とした（グループ構成は自由。個人発表も可）。今年度は例年に比して発表水準の低下が見られたが、グループ発表の許容が水準低下の遠因となった可能性も否定できない。

その他、H23年度より発表終了後に振り返りのためのミニレポートを課している（提出自由、提出者には加点）。このような自己省察／フィードバックのための仕組みをできるだけ入れたいと考えている。

7. 学生の反応

授業に対する反応は全体的に良好であったと判断している。どちらかといえば実践的な技能・知識を紹介する回（「外国人に分かりやすい日本語」等）の反応が特に良好であった。

一方、発表については水準の低下が見られた。具体的には、例年にも増してインターネット上のデータのみを用いる傾向および単一サイトからのデータに依存する傾向が強まった。さらに今年度顕著だったのが、何らかの意見が表明されているブログの内容をそのまま紹介したり、あるいはニュースの「まとめサイト」掲載のデータを、あたかもそれが原典のように紹介する傾向である。つまり資料の信頼性を検討せず、また、自己の(批判的)見解を付け加えることもなく、単に「紹介」する傾向が強まったのである。従来から、ネット上の単一ソースに頼る傾向や、そして自己研鑽よりも単位取得のため、最低限の努力で済ませようとする傾向は存在したが、今年度はグループ発表を許容した点が責任の分散に繋がった結果、上記の傾向に拍車を掛けたのではないかと感じている。

ただし、発表後の質疑応答は例年よりも活発であり、質問内容も的確なものが多かった。

8. 到達目標の達成状況

全体的に、到達目標は達成できたものと判断している。ただし上述した発表水準の低下は、ある程度まで質疑応答の場において補完されたとは言え、気がかりな傾向である。

9. 今後に向けた展開

全15週のうち、4週分を学生発表(質疑応答、教員のコメント含む)に用いている。これだけの時間を割くことの可否は悩ましいが、他の発表と自己の発表とを比較する機会を得ること、発表の実践経験を積むこと、そして質疑応答を通じて対話することは、やはり重要であると考えている。

ところで、創生授業は「3年以内の試行」との設定がある。個人発表が可能な人数は20名前後であり、今後、通常科目化を図る上でグループ発表の導入及び指導法の検討等を行う必要がある。これらの事情

を勘案し、H25年度は創生科目としての申請は行わなかった。今後、50名程度の中規模クラス対応を検討した上で、改めて創生科目あるいは主題探求型科目等への再申請を検討したい。

10. その他（関連資料など）